

# 田園交響曲 (ベートーベン)

長房囲碁同好会 池口隆久

テレビ画面にコーラスで第九交響曲を歌っている人の姿がよく映る。ベートーベンといえば第九。年末にはあちこちで第九を取り上げる番組がある。なにも第九が嫌いなのではないが「運命」も「田園」も「英雄」もある。「月光」も「セレナード」もある。多彩だ。

中学校の頃、うちには珍しく電蓄があった。これは近所の村内さんに作ってもらったからだ。村内さんの本業は醤油屋さんで、工場は大和田にあり、住まいはうちの近くの元横にあった。電気製品は趣味で作っていたが、電蓄はその結果で、当時は珍しいものだった。終戦後だから、当時は娯楽施設が乏しく、八王子の映画館は浅川橋近くの番場さんの工場で「愛染かずら」が上映されたときには必ず見に行った。村内さんはその後テレビを作るようになり、初めの頃は醤油工場の敷地にテレビを据え付けて見せていた。



当時はプロレスがブームで、大勢の人が大和田まで見に行った。力道山がアメリカ人レスラーを打ちのめすのが受けていたようだ。趣味で作っていたテレビが売れるようになるとめきめき業績を伸ばし、洗濯機、扇風機、冷蔵庫など家電製品の製造販売を広く手掛けるようになっていた。兄弟が経営する家具屋さんをしのぐ勢いであった。

さて、村内さんに作ってもらった電蓄

だが、兄貴は凝り性で、歌謡曲、クラシックを問わず、レコードを集めていた。当時は SP で、まだ LP は出回っていなかった。回転は速いので、レコード針をすぐに取り替えなければいけなかった。兄貴はレコードをあれこれと買ってはくるのだが、それを聴くのはもっぱら私の仕事だった。なかでも、ハンガリー狂詩曲第二番（リスト）、ハンガリー舞曲第五番（ブラームス）、それに「田園」はよく聴いていた。「運命」は何か重くて好みではなかった。「田園」を聴いていると、ドイツの田園風景が目に浮かび、そこを流れる小川が見えるようで、何度聴いても飽きなかった。未完成交響曲、第九交響曲というと、どうしても身分の高い人たちが連想されてきて、自分とは縁のないものとしてとらえていた。

(2021年11月)